
散華

天ヶ森雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

散華

【Zコード】

Z3332R

【作者名】

天ヶ森雀

【あらすじ】

桜の舞い散る吉原の夜、花魁が馴染みの客にせがまれて語ったのは、叶わぬ恋の物語だった。

TINAMIより転載作品。

「それは、叶わぬ恋でありんしたよ」

開け放たれた腰高窓からは、払つても払つても桜の花びらがいつの間にやら舞い込んでくる。

吉原には数百本の桜が植えられ、花に酔う客を手招きしている。同時に離れの座敷からは賑やかなお囃子や嬌声が響き、春の宵は祝宴真っ盛りだ。

「煩いでしょ。お閉め致しんしょ」「う

袂を抑え、格子戸をすらそりとする白い手を、男の声が止めた。
「かまわねえよ。桜なんてぱっと咲いて散つたら終いだ。この馬鹿騒ぎも両日中には終わるだろ?」

そう言つて着流し姿で寝そべりながら、花びらが浮かんだ盃の中身をそれごと飲み干す。はだけた胸に重が落ちた。あつさりとしたなりではあるが、その着物は絹だった。

「そうですか? それじゃあ…」

紅い長襦袢姿の女は、伸ばした手を引っこめて、夜風に唄や笑いが流れ来るに任せた。

黒塗屏に囲まれた遊郭は、どんな夜も灯りが絶える事がない。賑やかな笛や三味線の音の隙間で、ひつそりと客と女郎が睦み合つ。いつも一人でふらりと遊びに来る馴染みの客に、雲居太夫はしゃらんと三味線を搔き鳴らした。

男は無口だつた。

酒も程々で乱れる事もなく、ただ暇を持て余した様に彼女を抱いては帰つていく。

その男が、その夜に限つておかしな事を言い出したのは、やはり桜が惑わせたのだろうか。

「何か話してくれないか？」

「何か、とは」

「何でもいいよ。寝物語に姉さんの声を聞いていたいだけだ」

太夫の声は高すぎず低すぎず、深みがあつて艶っぽい。男はその声を気に入っていた。

「全く、やぶからぼうでりんすねえ」

ふふふと笑つて、太夫は畠に散つた花びらに田をやつた。

久方の 光のだけき春の日 じづこじるなく 花の散るらむ

…ああ、あれは誰の詠んだ歌だつたらう。紀貫之…、いや友則だつたか。

「そう、多少辛氣臭い話になるやもしれませんが…昔聞いた話をひとつ」

本当にあつた事がどうかも分かりませんがねえ、と笑いながら、女は遠い田をして語り出した。

その娘はおちかといつた。

幼い頃に親兄弟と死に別れ、とある商家に引き取られ、下働きをして暮らしていた。

朝から晩までこまねずみの様に働かされ、けれど不平不満を言う事もなく、ニコニコと大人しい娘だつた。

そんな彼女が変わつたのは数えで十六くらいの頃だつたらうか。お使いに出た際、切れた下駄の鼻緒を、通りすがりの男にすげ替えもらつたのだと言つ。

彼女からその事を聞き出した、同じ下働きをの女が「いい男だつたかい？」とニヤニヤしながら聞くと、おちかはうなじまで真つ赤

に染めて俯いたのだつた。

「奉公人ですからね、そんなに暇があるわけじゃがない。それなのに、その男とまた店の前でばつたり。それからおちかは変わりました。内氣でしたからね、たまの休みも女中部屋にこもって繕い物やなんかをしてたのが、いそいそ出歩く様になつて。取り立てて美人と言う訳じやあじやなかつたけど、それでも花が綻ぶ年頃ですよ。ぱあつと笑顔になれば、それだけで場が華やぐつてえもんです」

しゃらんと再び三味線を鳴らし、太夫は紅い目尻を下げる微笑んだ。

「男は浪人だと言つてました」

浪人とは言え、身なりはござつぱりとして物腰も穏やかだ。三十路にはまだ遠いだろう。姿勢の良さと言葉使いに育ちの良さが窺える。笑うと目尻に皺が出来た。

世間知らずの小娘の事だ。一緒に道を歩くだけでのぼせあがる。一目その姿を見ただけで、笑顔が満開になるまでには、あつとう間だつた。

小さな文を交わしあい、人目を避けた船宿で逢瀬を重ねる様になつたのは、男女の自然な流れだろう。

しかし、おちかの幸せは長く続かなかつた。

奉公先の商家に、ある夜押し込みが入つたのである。

幸い人死には出なかつたが、金品や高価なものが盗まれた。

盗賊は捕まらなかつたが、詮議の結果、夜中に通用口を開けたのがおちかだと分かつた。

彼女は恋人が会いに来ると言われ、素直に心張りを外してしまつたのだ。

知らぬとは言え、盗賊の引き込みをさせられたおちかを、商家は許さなかつた。

真面目に働いていた娘ゆえお咎めはなかつたものの、着のみ着の今まで叩き出され、おちかは途方にくれた。

そもそも、何がどうしてこうなったのか、見当もつかなかつた。
(あの人が盗人…? 押し込みの為に私に近付いたの…?)

頭では分かつても心はついて行かぬ。

住むところも身寄りもないおちかが、苦界に身を沈めるのに、そう時間はからなかつた。

「…よくある話でございましょう? 世間知らずのおぼこい娘が、男に利用され、捨てられたんですよ」

一抹の哀切を隠して忍び笑いながら、女は淡々と語り続ける。

落ちるところまで落ちたと言つべきか。

春をひさぎ、客をとる様になつても、おちかは愚痴をこぼす事なく仕事をこなした。無口さ故陰気な娘だと乱暴に扱う客もいたが、決して不平は漏らさなかつた。

女郎部屋の仲間が気味悪げに尋ねる。

「本当はあんたを裏切つた男が憎いんだり? いつそ恨み辛みをぶちまけちまえばいいじやないか」

訊かれても、おちかは困つた様に笑つだけだつた。

確かに辛くないと言えば嘘になる。殴られるのは奉公先で慣れていたが、飯が食えない日が三日も続くと流石にきつい。

橋の下で筵にくるまつていた時は、足の指先がかじかんで眠れなかつた。

しかし、脂臭い男の息や芋虫の様な身体をまさぐる指も、慣れてしまえば耐えられぬ事はなかつた。

何より辛いのは、会えない事だ。会いたくて会いたくてたまらない人に会えない事だつた。

あの人は今どこにいるんだろう。

どこで何をしているんだろう。

おちかの小さな胸に、身を捩る様な痛みが走る。

その痛みはどこから来るものか、おちかは何度も考える。

「私ねえ、あの人にもし会えたら…聞きたい事があるの」

ぱつりと漏らしたおちかの言葉に、女郎衆は呆れたように笑った。

「そりゃあいっぱいあるだろつた。恨みつらみも幾月歳、全部ぶちまけてやりやあいいよ。…まあ会えたの話だけどね」

女達はしゃらしゃらと明るい諦めの笑いをこぼす。

「そうよねえ」

おちかは相槌をうちながら、やはりひつそつと笑った。

そんなある日、彼女を訪ねて一人の侍がやってきた。

菅笠で顔を隠したその様は、身なりが良く目付きが鋭い。客の振りをしたその侍は、部屋に入ると着物の懷から金子の包みをおちかに差し出した。

「我が主よりこれを」

ぽかんと口を開け、言葉が出ないおちかに、侍は正座したまま話し出す。

「実は

さる御方から頼まれた。

その御方は国に帰れば役職につく高貴な身分であったが、とある陰謀に巻き込まれ、家宝の品を騙し取られた。

その家宝はお殿様より直々に下賜されたものであり、何かあればお家断絶も免れない。その御方は陰謀を暴くと共に、奪われた品を奪還すべく、殿に願い出て単身探索の旅に出た。

お前が勤めていた商家の主は、あのお方と同郷で、陰謀の主と繋がっていたのだ。

彼のお方は隠密に事を運ぶ事が無理だと悟り、盗人を装つて家宝を取り戻した。

「火急の知らせがあり、急ぎ国に戻られたのだが、長らくお前の事を気にしておつた。これは僅かばかりだが詫びの印である」

おひかはますます息を飲んでだまりこむ。

陰謀？ わ殿様？ お店の旦那様は悪いことに加担していたの？

確かに意地悪で冷たい方だったけど…

おちかの沈黙をじう受け取ったのか、侍は渋面を作つて続けた。
「ま」との名も国許もお前に明かす事は出来んが…元を正せば由緒正しきお家の方。離れてはいたが、國には妻子もいらっしゃる。ようやく一緒に暮らす事が叶つたばかりじゃ。想つところもあるつが、あの方の事は一切忘れて」

言ひながらきょととした。

一言もなかつたおちかの頬を、つうつと涙が流れ落ちたのである。

「奥方様とお子様…？」

「や、やじりや。だから」

諦めよ、と言ひ言葉は口の中であえなく溶けた。

恨み言を言われるのは覚悟していた。泣き喚くかもしれない、とも思っていた。

しかし、そのどちらでもなかつた。

一滴の涙を拭いもせず、おちかは澄み切つた笑顔を見せて、いつ

言った。

「それじゃあ…あの方は今、お幸せなんですね？」

「ふたごころのまつたくない、満開の桜の様な、そりゃあきれいな笑顔だつたそりであります」

三味の音はもう鳴らない。

馬鹿騒ぎの宴会も終わつたのか、お離子の樂も止まつていた。

「おちかはそのお武家様にこう申し上げました。『今の言葉で充分です。それだけがずっと気がかりだつたんです。どうぞこのお金は国許にお持ち帰りになつて、の方にこうお伝え下さい。ちかは元氣で幸せにやつていて。いらぬ氣遣いは無用にござります、と』。

おちかの笑顔に気圧され、その侍は一旦宿に金子を持ち帰り、一晩田の前に眺めて思案しましたが、もう一度と翌日おちかを訪ねていつた時にはおちかはもういやしませんでした。誰に聞いても遠くに言つたらしいとしか答えちゃくれません。胸の奥になにか重たいものをかかえ、お侍様は国許へお帰りになつたそうですよ」

長い話を語り終えてホッとしたのか、太夫の顔は明るい。白い指先が膝元に散つた花びらを数枚拾い、手に平から息を吹きかけて飛ばした。

淡い薄紅の花びらが、太夫の息を受けてちらちらと舞う。

「ねえ、旦那。これは叶わなかつた恋の話であります。でもねえ、この話を聞いた時、何と言いましょうか、あちきは

舞う花びらに視線を向けて、しかし太夫が本当に見ていたのは何だつたのか。

黒い双眸にちらりと紅い焰^ひが見えたような気がして、男はぞくりとその背筋を振るわせる。

「あちかは、おちかの全うした恋の潔さに…妬ましさを覚えた
した」

言葉とは裏腹に、いとけない唇で女は笑つた。

それは、春をひさぐ女にしか分からぬ通念であつたろうか。

光のどけき春など知らぬ。

女郎が生きるのは夜の修羅と相場が決まつてゐる。

しかし、散り急ぐ花のあでやかさは知つていた。

時折、苦界にあつて、恋の花を咲かせるものもいぬではない。その者達は驚くほど鮮やかな散り際を見せて皆になくなつた。

「あちきは…特に桜を見て綺麗と思つたことはありんせん。単に、春になれば咲き、散る花とだけ思つておりました。でも…この話を聞いてから、この桜の時期になるとおちかを思い出すんです。おかしくいうござりますね。おちかが死んだと決まつたわけでもないのに「子供のような笑みが、薄闇の中に溶ける。

黙つて話を聞いていた男は、のつそり立ち上ると太夫の背後にまわり、背中から彼女を抱きしめた。

唇が白こうなじをつうとすべる。

「旦那、お休みになるんじやなかつたんですか？」

「姐さんの話は、子守唄に聞くには色氣がありすぎらあね」

意地悪く笑いながらハツ口から手を入れ、女の胸を揉みしだく。

「まつたく…」

苦笑しながら太夫は抗わなかつた。どんな気が立つたかは知らぬが、情に耽るには良い夜だろう。

女の柔肌を楽しみながら、男は心中溜息を吐く。

まったく、女ってのあ、なんて不可思議で恐ろしい生き物なんだろうな?

仮にも太夫にまで上り詰めた女が、恋に墮ちた娘を妬ましいと言つ。

叶わぬ恋と言いながら、その情の深さには恐れ入る。俺がその男だったら、一目散に逃げ出しそうだがね。

そんな己の意氣地なさを自嘲しながら、男は女を襦に組み伏せた。紅い夜具の上にはやはり桜の花びらがちらちら落ちて、女の肌を憐く見せている。

よもや太夫が当の娘では、とふと気付き、男は一瞬腰が引けるが、女のはんなりした笑みに抗いきれずその身を沈めた。

浮世に舞い散る無限の花びらは、叶わぬ恋に溺れる女達の、淡い
写し絵だったかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3332r/>

散華

2011年4月27日14時25分発行